さざなみ国語教室
第467号　2021年2月25日
発行者代表　吉永幸司
連絡先　大津市柳川2-11-5
TEL 077-522-1008
発行所　滋賀児童文化協会
NPO 現代の教育問題研究所

「国語力は人間力。」

阪上　由夏

これは、私が育った京都女子大学附属小学校の合言葉だ。昨今、特に若者の間での言葉の乱れを指摘する声が目立つように思う。実際に、会話をしていて単語や熟語の扱いが雑になったという感覚は否めない。なぜ、言語の扱いが雑になってしまっているのだろうか。

原因の一つに、コミュニケーションにおける距離がなくなりつつあることが挙げられるように思う。今までは面と向かって話す場合でしかタイムラグのないコミュニケーションがありえなかったことから、意図や意味合いをより正確に伝える必要があった。しかし、それが技術の進歩によって電話、メール、LINE、そしてそこからさまざまなSNSと、多くのツールが生まれ顔を突き合わせなくてもリアルタイムでのコミュニケーションが可能になったのだ。近しい関係では仲間内でしか通じないノリが生まれてきやすいだろうし、そのノリの一環として仲間内でしか通じない単語たちも生まれることだろう。そして、その「仲間内」の範囲が世界へと広がったことによって、また正確に文意を伝える必要性がなくなった(ように感じる人が大勢いる)ことによって言語はあいまいなものへと変異していったのではないだろうか。

ここで、ネット上での特に文字媒体を介したコミュニケーションによるもめごとを想起された方もいらっしゃるかもしれない。そう、技術の躍進は決して正確な意思疎通を手伝ってくれるばかりではない。それと同じくらいに、あるいはそれ以上に「伝わったという感覚」を両者に助長するものだ。日頃生きている場が違う者たちが交流できるようになったことは、同時に相手の文化を尊重する必要性がより一層出てきたということでもある。技術の利便性に引きずられることなく、ツールとして理性的に使うべきだと言えるだろう。そして、それにはマナーという共通したルールが大きく寄与すると思う。なぜなら、共通のルールを持つことで相手の意図がわかりやすくなり、価値観や感覚の相違に対応しやすくなるからだ。

今軽んじられ始めているのは言語の正確性だけではない。人間関係において距離感はとても重要な指標のはずだ。効率を重視するあまり、かえって無為なトラブルを産んではいないか。私たちは今一度見直す必要がある。

（洛南高校附属中学三年）

さざなみ

▼オンライン研修会（ZOOM）「国語の板書」へ授業のコツがよくわかる〉を開催しました。（令和３年２月）オンラインの教員研修は、より効果的な手法の開発を求めて、これから進んでいくことが予想できます。セミナーでは、動画とナレーションを組み合わせ、理解しやすい形にしたいと考えました▼今回は、『京女式深い学びをめざす国語の板書指導５年６年』（小学館）の出版を記念しての研修会です。「みんなの教育技術」教育技術セミナー）冊子の板書は、京都女子大学附属小学校の砂崎美由紀先生・酒井愛子先生の授業から。動画を通して、どのように板書が完成するか、過程がわかるよう知恵をだしあったものです▼学用品の中にタブレットが入ってくる時代になりました。長い間、教室の正面に位置していた黒板が、その役割を果たすのかという事も、問題意識として持っています。附属小学校長として赴任したとき、砂崎先生・酒井先生を初め、小学校の全ての先生の板書の美しさ、丁寧さをみて「国語力は人間力」という言葉がひらめきました。言葉と心が一体になっているのだということを知ったときでした。▼人間力の基礎を育てる小学校段階における板書の力は、タブレットが主流になる時代において、大事に引き継ぐことが多いことを確認する機会になりました。（吉永幸司）

さざなみ国語教室のホームページ　http://www.eonet.ne.jp/~sazanamikokugo
NPO 法人 現代の教育問題研究所のホームページ　http://kokugo-npo.com/index.html　ご覧ください。

ものの見方を広げる

北島　雅晴

テープカッターを提示して、何に見えるかを二年生の子どもたちに尋ねてみた。

「テープ台は、～のようです。」

Ｃかたつむりのようです。

Ｃサイのようです。先の部分が角になっている。

Ｃくじらのようです。

Ｃくつのようです。

Ｃ月が昇るように見えます。セロハンテープがお月様です。

思った以上に、いろいろな見方が出てきた。二年生の発想はたいしたものである。

次に、「雲」について尋ねてみた。

それぞれの子が見た雲は違ったものなので、いろいろな発言が出てくる。

・犬の毛　　・ふわふわの毛

・白い海　　・けむり

・実験で爆発したけむり

・ちょうちょ　・羊の毛皮　等

Ｃ白い海というのは、飛行機から見た雲です。

Ｃ雲ばかりで、海のようでした。

Ｃ綿菓子も考えたけど、だれでも思いつきそうなのでやめました。

Ｔではこの中で、一番きれいだなと思うのはどれでしょうか。

子どもたちは、「白い海」が一番気に入ったようである。

ここまでは練習問題。

【　　】は～のようだ。

という文を作る学習を行った。

Ｔ例えば、【　】に「お母さんが怒ると」と入れると、～には何が入りますか。

Ｃうちのお母さんは優しいけど：

Ｃ分かった、「鬼」が入る。

Ｃ「地獄」です。

Ｔそれは、ちょっと大げさすぎないかな。

という話をしながら、文を考えることにした。

○妹がわらうと、まるでてんしのようだ。

○ぼくのつくえの上は、高い山のようだ。

○お母さんがおこると、まるで火山のようだ。

○弟がなくと、まるできゅうきゅう車のようだ。

といった文を一人二～三文作った。その中から一つを選んで詩を作るのが、次時の学習となる。

この学習は、「ようすをあらわすことば」の学習の一環として行った。例えば、雨が降る様子を表す場合、「しとしと」「ざあざあ」「ぽつぽつ」ということばを使うことによって、表現の広がりが生まれる。地味な学習ではあるが、その場に応じた言葉を見つけることによって、ものの見方が広がり、語彙を豊かにすることができる。言葉は、実際に話したり書いたりすることによって、豊かになると考える。ちょっとした、言葉の学習を大切にしたい。

（栗東市立大宝小学校）

日記のように詩を書こう

蜂屋　正雄

「見たこと、かんじたこと」（光村二年下）で、子どもたちと詩づくりに取り組み、現在も詩づくりを楽しんでいる。

「良い詩とは何か」、「詩を読んでどんな良いところを見つければいいのか」と考え出すと、答えはたくさんある。そこで、一学期から取り組み続けていた日記のように詩が書けないか、と考え実践した。

学習のステップ

①詩に親しむ

②まねをして詩を書く

③詩を元にイメージマップ→日記を書く

④イメージマップから詩を書く

日記のように、日常にあることを元に、詩を書き、いいところを見つけ合うことを目標にした。

① 教科書の三つの詩の面白さを見つけ、「いいな」を共有する。

② 特に「ねこのこ」の作風をまねて、続きを書く。「じぶん」「ともだち」「かぞく」を題材にする、など。

③ 「二じゅうとびとんだ」を元に、想像したことをマインドマップに書く。その後、マインドマップを元に日記風の作文を書いた。

④ 自分の心に残った体験を元にマインドマップを書く。その中の一番伝えたいことばを決め、それとつながることばを選び、詩を書いた。

子どもたちは、③で、七行の詩からたくさんのことが想像できることを実感した。そして、詩は伝えたい言葉を厳選していることを体験的に学ぶことができた。そして、④のステップで、

・マインドマップの中から、自分が一番伝えたかったことばを見つける。

・そのことばとかかわりのある別のことばを線でつなぐ。

・つないだ言葉を時系列でならべて一番言いたいことばで締めたり、学習した詩の良さ「くりかえし」「リズム」「ことば」を意識したりして、思い思いの詩を書いた。

ことばを選び、自分の思いが伝わるように順序を考えて文を構成する体験ができた。

「正しい詩の書き方の指導」とは違うかもしれないが、詩に親しみ、作ることを楽しめる時間にできた実践となった。学習後、毎週末の日記には、たびたび詩が書かれている。ことばが厳選されており、日記よりもよく伝わってくる詩になっている。

カレー
すてきな　一日
はじまる　よかん
カレールー　あふれて
いいにおい　じゅわじゅわ
いやなことわすれる
ごちそうだ
きょうもげんきに
いただきます！

これからも、伝えたいことを伝わることばで書く活動を続けていきたい。

（草津市立矢倉小学校）

思い出を言葉に

箕浦　健司

「思い出を言葉に」（光村　六年）

卒業が間近に迫ってきたことを実感する二月となった。一人ひとりがカウントダウンカレンダーを作成し、教室に掲示している。二月十七・十八日には、小学校生活最後の学習参観が実施される。「小学校生活で一番の思い出を、詩・短歌・俳句に表して、お家の人や友達に伝えよう」を単元目標に、学習をスタートした。

本単元の指導事項は、

◎目的や意図に応じて、感じたことや考えたことなどから書くことを選び、伝えたいことを明確にすることができる。

◎作品全体の構成や展開が明確になっているかなど、作品に対する感想や意見を伝え合い、自分の作品のよいところを見つけることができる。

「書くこと」については、互いの作品を読み合い、よさを伝え合う活動を大切にしてきた。本単元においては、参観での発表を告げたときは、「えー！」とお約束の反応が返ってきたが、子どもたちはすぐに集中し、取り組み始めた。俄然気合いが入る。「最後」という言葉は、子どもたちの集中力を一層高めるようだ。

今回一番のポイントは、「伝えたいことを明確にする」こと。そこで指導者として大事にしたのは、「何について書くか」ということを確認する際、行事等ではなく、伝えたい中心として考えられることは何かということを話し合ったことである。教科書の例は、六年生になり、参加した入学式で一年生と手をつないだときに芽生えた最高学年としての「自覚」であった。他にどんなものが考えられるか。子どもたちからは「達成感」「満足感」「友情」「努力」「喜び」等の意見が出た。

四年生のやまのこ、五年生のうみのこ、六年生の修学旅行、また運動会。これら大きな学校行事は、子どもたちの心に強く残っている。実際にこれらの行事で考えた子どもは多かったし、伝えたいことの中心がはっきりしていれば、何について書いてもよいのだが、今回、「伝えたいこと」についての話し合いで視点が明確になったことで、特別な行事ではなく、日々の努力やその成果について書こうとする子どもが多かったことが、個人的に嬉しかったことである。

以下、子どもの作品。

・話し合ったよ　班のみんなで問題が解けなくてつまったとき話し合ったよ　班のみんなで　問題が解けたよ　話し合って解いても難しくてもっと話し合っていけばできる問題を解いていこうと　決めた

・四年生までは　テストの結果が悪かった　でも今は　とてもよくなっている　テストの結果が　それは　テスト勉強を　がんばったから　とてもがんばった　これからも　中学生になっても　努力を　続けようと決めた

前者の伝えたいことの中心は「協力」。一人ではできないことも、友達と協力してできたことが一番の思い出。後者は「努力」。信念をもって続けた自主学習が結果に結びついたことを伝える詩。反復やリズムの工夫なども取り入れた。最後の参観当日の発表が、とても楽しみである。

（長浜市立南郷里小学校）

成長

弓削　裕之

毎年三学期の始め、子どもたちは「ふじのこ作文」を書く。一年間を振り返って自分が成長したと感じることを綴り、全校児童の作文が載った「ふじのこ文集」として製本される。表紙には木のイラストが描かれており、毎年少しずつ葉の数が増えている。六十年の歴史がある取り組みだ。

例年、五年生の作文は臨海学校の話題が多い。海での水泳学習や、友だちと協力して過ごす三日間は子どもたちにとって大きな経験であり、「成長」をテーマとした作文の題材として選ばれるのは納得できる。

しかし今年度は、感染拡大防止のため臨海学校が中止となった。臨海学校だけでなく、運動会や音読集会など、たくさんの行事や学習が実施できなかった。子どもたちの中には、「何を書いたらいいんだろう」「成長したことなんてなかった」などのつぶやきがあった。「何気ない日常の中の成長に目を向けましょう」と声をかけた。

Ａさんの作文は、次のように始まっていた。

ある日、大分前のことだが、弟と一緒に鉄棒へ遊びに行った日のことを思い出した。鉄棒で弟は、逆上がりの練習をし始めた。私は、何回も鉄棒から落ちる弟を見て、逆上がりもできないのかと思った。その日は、私にとっては何の変哲もない日だった。

最後の一文がとても効果的で、「何の変哲もない日」が「特別な日」に変わるのだろうと予想できた。この後、五年生の鉄棒の課題であるひざかけ回りができなかったこと、きっと周りから笑われているだろうと恥ずかしくなったこと、そんな自分に友だちがアドバイスしてくれたことが綴られていた。

あまり話したことのない男子がひざかけ回りのことについてアドバイスをしてくれた。実際にやってみると、かなり大変だったけど、何回もやっているうちにできるようになった。私はその時、あの日のことを思い出した。あの時、なぜ弟に教えてあげなかったんだろうと。ふとそんなことを思い、心が少し変わったような気がした。

「心が少し変わったような」という表現で、Ａさんは自分の成長を言葉にしている。大きな行事に目を向けていたら、気づくことのできなかった変化かもしれない。

家に帰り、弟にあやまり、逆上がりを教えることにした。私は、弟にアドバイスし、実際にやってみたらいいんだよと言った。（中略）練習を続けて数日後に、弟も鉄棒を一周できるようになり、笑顔で鉄棒へ遊びに行く日が増えた。

この作文の題名は、「増やせた笑顔」。自分の行動で弟が笑顔になってくれたことを喜ぶ気持ちが伝わってくる。成長の喜びは木の葉となり、これからも受け継がれていく。

（京都女子大学附属小学校）

近江の子ども俳句教室
〈投句部門〉
～3162句の感動～
好光幹雄

ＮＰＯ法人現代の教育問題研究所主催、令和２年度「近江の子ども俳句教室〈投句部門〉」の報告です。

大津市長賞　（学校名略）
きものきてモデル気分の七五三　１年山下凜夏

◆七五三に、とびきりかわいく、すてきなきものを着ている姿と、にこにこしているまわりの人たちの様子を想像しました。その時の気持ちを、「モデル気分」という言葉であらわしたかっこいい作品です。（吉永幸司）

草津市長賞
さんぽ道コスモス見つけたおともだち　２年小島翔大

◆散歩は楽しいですね。見慣れている景色の中にもいろいろな発見があります。友だちがコスモスの花を見つけ、教えてくれたのですね。友だちと一緒にコスモスの花をながめ、話がはずむ様子が目に浮かんできました。（三上昌男）

以下、評略

大津市教育長賞
たこ上げだどこまでとばすかきょうそうだ　３年志村快之助

草津市教育長賞
うちの犬初めての冬こせるかな　５年綿田凛人

草津俳句連盟会長賞
名月に虫飛んでゆくシルエット　６年中清水初奈

ＮＨＫ大津放送局長賞
息白しシャトルが飛び交う体育館　４年青柿心優

ＢＢＣびわこ放送賞
毛糸あむ父のマフラー三年目　３年松岡梨華

ＦＭおおつ賞
ふかふかの空の海で泳ぐいわし雲　４年二見英嗣

えふえむ草津賞
サンタさんそりのうしろにほしがある　１年北山陽葉

京都新聞賞
湯たんぽがあったかいお湯ぽぽぽぽぽ　４年勝山世名

中日新聞社賞
満月を見ながら猫も丸くなる　６年加茂野菜桜

読売新聞大津支局長賞
帰り道近くの家に寒椿　４年城茉柚花

毎日新聞大津支局長賞
マラソンだ！　とうちゃんかあちゃん見に来いよ！　３年山下大凱

朝日新聞大津総局長賞
ジャンバーでランドセルがせおいにくい　２年佐藤想太

産経新聞社賞
さざんかの花びら水面にあそんでる　５年伊藤羽菜

ＮＰＯ法人現代の教育問題研究所賞
木枯らしが早く帰れと背中押す　６年片山史桜

応募句総数３１６２句。大賞１６句。入選１２３句。詳しくは当ＮＰＯ法人のホームページをどうぞ。

バーチャルな世界が広がり、今の子どもは肌身を持って体験するという機会が昔に比べて少なくなっているような気がします。私が子どもの頃は、夕方暗くなるまで野原で遊び、遅く家に帰ってよく母に叱られたものです。しかし、その頃の夢中になって自然の中で友だちと一緒に遊んだことが、大人になってからの私を支えてくれたのではないかと思うようになりました。ノーベル賞受賞者の多くが、その神童ぶりを語るのでは無く、子ども時代の素朴なそれでいて豊かな体験をしたことが人生の大きな宝物であるという話をよくします。俳句を詠むということは、ある意味で、そんな貴重な体験を言葉を通して表現することで、体験を意味づけたり価値付けたり、そして自分の財産として残すことに繋がっているのだと思います。つまり、単に体験をするだけでは無く、体験を言葉によって、言葉を通して人生の掛け替えのない経験としているのです。子ども時代は単に大人になるための準備期間ではありません。子ども時代を豊かに生きることこそが、豊かな大人になることだと私は思います。ですから俳句も細かな形式にこだわらず、どうぞ自由におおらかに詠ませてあげてください。そうすることで子どもたちの心と感性がぐんぐん伸びていくことと思います。最後に、ご後援をいただいた滋賀県知事様をはじめ、多くの皆様に深く御礼申し上げます。深謝。

（立命館小学校）

編集後記

▼一月例会は（第四六五回）は「現代の教育問題研究所」が企画した、「近江の子ども俳句教室」（令和二年度投句部門）の入賞作品集を作成する作業に充てました。▼「特定非営利活動法人現代の教育問題研究所」は、定款に、目的を「この法人は、直接教育現場に携わる人々のみならず広く一般市民に対して、国語力は人間力という認知を広め、国語力を育てることを通して子供の健全育成を図り、さらに国語力や心の教育に重点をおく社会教育の推進を図る事業を行い、他者との協調を円滑にし、確固たる自らの信念を持ちつつ他者を思いやる、豊かで幸せな社会づくりに寄与する」と示しました▼事業は（１）国語力・心の教育の指導技術の向上及び継承を行う事業（２）国語力・心の教育の実践を広く行う事業（３）国語力・心の教育を広く周知する事業。活動として、今回の子ども俳句教室をはじめ、子ども対象にした教育相談事業。教員を対象に、授業力向上講座、教育セミナー・道徳教育セミナー・教育実践交流・授業づくり支援。一般市民に対して、俳句大会を行っています。（本年度は、それぞれ活動を縮小、あるいは、自粛しています）▼今回は、投句という方法で活動の幅を広げました。更に、セミナーについては、リモートという方法で活動を広げることができると考えています。▼巻頭には、阪上由夏さんから玉稿を頂きました。深謝。

（吉永幸司）